



第36回 日本臨床微生物学会総会・学術集会

セミナー名 ランチョンセミナー7

演題

細菌検査と  
感染症遺伝子検査の融合による

# “真の臨床微生物 検査への進化”

座長

大楠 清文先生

(東京医科大学 微生物学分野)

演者

口広 智一先生

(公立那賀病院 臨床検査科)

日時

2025年1月25日(土)

11:55~12:45

会場

第9会場

(名古屋国際会議場 2号館3階 会議室234)

ランチョンセミナーは、事前申込制となります。  
学会HPの「ランチョンセミナー」ページよりお申込みください。

共催

第36回日本臨床微生物学会総会・学術集会



東ソー株式会社

TOSOH

# 要旨

ランチオンセミナー7

## 細菌検査と感染症遺伝子検査の融合による “真の臨床微生物検査への進化”

公立那賀病院 臨床検査科

口広 智一 先生

COVID-19の世界的パンデミックにより、わが国において多数の医療機関に遺伝子検査が整備されたことを機に、遺伝子検査の運用を導入した微生物検査室も少なくはないだろう。しかしながら、ポストコロナ時代となった現在、COVID-19以外の感染症遺伝子検査も導入した施設はどれくらいあるだろうか。感染症の原因となる病原微生物には、一般細菌だけではなく、嫌気性菌、抗酸菌、真菌、寄生虫、原虫類、ウイルスなど、様々な種類が存在している。従来の細菌検査室においては、一般細菌や一部の真菌に対する培養検査を主として実施しており、それら以外の微生物の検査は院内で実施せず外注とするか、検査不能としてあきらめていた面もあったと思われる。その理由としては、一般細菌以外の微生物は、通常の培養検査では発育に長時間を要するものや、培養自体が困難な微生物も多く存在するからである。このような検出困難な微生物の検出に有用な方法の一つが遺伝子検査である。遺伝子検査は一般的に検査手技が複雑で難しい検査であり、一部の検査室だけで実施できる検査であるとの印象を持たれがちであるが、近年の機器や技術の進化によって、中小規模の微生物検査室においても実施可能なものとなってきており、一時代前とは状況はかなり異なってきている。これからの時代においては、細菌検査と感染症遺伝子検査の融合による“真の臨床微生物検査への進化”を目指し、可能な限りあらゆる微生物に対応できる微生物検査を構築していく必要があり、それによってより良い感染症診断への貢献が可能となる。本セミナーでは演者の施設における細菌検査と感染症遺伝子検査の融合例を紹介させていただき、今後の目指すべき微生物検査のあり方を考える機会としたい。